斷橋思薄

上

水茎の落たる事を詠ずるの
ゆゑ也やうやうに里ゆゑふ大路の道く
さまをもおもふ事芭蕉翁
一流のまことをうけ給ふ俳徳のおも
ふ計なかるべし久しき物ゝ萬葉ゝ
和ら又神ふ也あれ仏ふ也あれ
たふとしとわすれ人情のまこ

[illegible]
おいて[illegible]乃[illegible]に[illegible]久
方は光[illegible]
四五七五の詞も[illegible]
世情に[illegible]
祖翁のみなもと[illegible]
[illegible]

[illegible]句いの計りなや員[illegible]
[illegible]
めおもふ[illegible]
違なるも無[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

墨田川の水中より一石一字を記し
俳句書して源を尋ぬれば十九年あまり
東京のこゝろも嵐山北の源をくむ
おもふに過ぎしつゝ一切俳句年
ごとに移りゆく讀俳のもの世俗の
及ぶ所志ゝ同じあれば移り
もゝ野かゝ社團を成し發句集をい

ろもとめ其の數はうち忘れ小磯
乃貝の如くに拾ひ老はのこゝろ
を波乃紅魚の網をひらき
よゝゝゝ
見つゝ原もうゝわたるこのあてまつ
初編記ゝ
志ゝ初花を梅木の句義未

ふる見ぬ人も此めてたき御代にあひ人の皇都に
りしその業のみの栄えて遠ふまつ北
なると作にしるしおくのみ

安政二年十月

萬雅庵由誓記

影橋思藤春之部

歳旦之部

元日ゝ楢木のまゝの心かな

草庵

元日ゝ生飯に添る蓬ヶ雑

過日庵祝辞

冬籠りたゞ続て来年をにほふ人も

来て今日はいかなる事にか有るらん
と思ふ折しも籠者の家より
第四位の人の気性の逸はずして
いつのにか覚束なく祖父法師の吾
家を去れる後嗣なく繁昌浮世
当たりちの乳母なりけり世を注
来三年五百七十六経の日瞬息の間

帰り来て何ぞの門を行き慈母の
を安しうなるの思ひ出さる
又ちよりの別れ去りし
篠山郭の月花の気雅を物を
したりもの思ひなくなりしこと
うらやましく思ひ来れる
八雲の高きのこころの自ら生
ようとの為に拾ひて為

紹光の祝詞ふよ聖祖のへかて古
きさ口もこ雲くいふ面きうもさ奥
霧へ志うさるもまたをこ
明うを和雲元日ちう勝里ちたう
蓑やきき元日二日三日う耶
辛丑元旦
六十年来明窓浄几
暁天新香煙斜安ちう浸

毫蓮茶社裏人、
月のたうたうきを元て志武巴ひり
年阿ものて謝ちう家の近さこかし
人西下ちう志ちたき志ちたき茶くう
ま遠ひしてこう家ぬう茶西さうハ三
百年ゆ生ものもうんるも一國をう
治め来配掛へき戈ん出きうるもを
ちう浸しく奥ちうしのへう城

仙集かとたゝに詠ていなあるおこの
ことをこゝに家をうゝ隠る光りをまた
思ふ我のとそう思ふ思ふ思あて人と
もうゝふゆみとい色がおあをゝ人ゝ
けゝとそ人のかゝゝ思ふ思ふ
の旅ゝかゝゝとすゝ家を朝ゝ雪
を回しゝふあをゝ白ゝあるもく所
ゝゝ思ひてゝゝあゝそゝ思

東をくゝ旅ゝをゝこゝゝあゝ
きゝしゝ白ゝ思ゝ仙家を若く
霞旅をゝをゝあゝの紅霞をひき
角かゝて旅の思ふ抱愚上人とを
志ゝたゝをゝしゝさゝ也

思の一家ゝ
おゝまゝ　なゝゝゝ花の
おゝかゝ井の水を勢恵を河ゝ
ゝゝゝ玉川の流を瀬人也

若水やうるみてうすき雪の底

一切経勧進の興行を起してより

先づ大繁盛新強盛事の

ぶ清らかに咲まさへ初の出

大蔵経義の志願の漸く一部の

表紙まつへ

雪乃紙にいてゝおくふまつの日の時

湖水先まく

金澤も浦つきなれ初霜

塚乃松ちさうちさうのうらうら

萬戈のかし咲して霜の来

万葉ゆうかう度や辻ちさし

ちさうら門る葉かの日蓋前

拉因氏幼児のうしけ表紙

大業年ちうれうの男のみ

ちさうや名を書へし女文字

猫つめかくふる脊や　る方貝
蓬莱いの変ける浦の秉色
吹つるや　当年ひさうふ物ふれ
月一脊　雄蔡の猫ふ芦ひ月
破鷹ちや　猫のこ母ふ猫　四ち

第　尾

吸ふ　像のさて　梅　物　ふつ
第ふ戸ふ　ふ　ふ　世　芦の

うきりまふ　丙　城の四　ちの第
猫食乃　芦ふ　ふ　年　男

初春ふ部

経赤塚ふ　茂白　ふて
唐人ふ　ふ　ふ　筆　船
月ふまへた　ふ　ふ　ふ
仆　添ふ　赤　ふ　猫　年　ふ
角のふ　ふ　ふ　ふ　ふ

一くさ古つゝおもてを覆ふ苔のみゝ
みゝ一この蟬ゝくて
きゝ門夢や黄金袋を土産にて
家業塚のふるき紙ちぎのきく
初夢やねこの背ゝ丸まこゝ丸まて
多迦の海益や強よむ一ふり
兄ふまて〳〵おゝ拭をの丸一茎葉
姐よ釣気こゝ法見の茶永雑

稼おこゝ丸者焼の手筋きゝこの
きあさを何きゝ丸者ゝ丸
市ゝ物生て宋ゝ代ゝ丸ゝ
月過ゝ丸きゝくさゝ雪の蓋ゝ丸
蝉ゝつゝ一泊ゝきゝの老小鴨茶
畑芋壁蒜もゝゝて揚ゝ
小ゝ丸ゝ丸雪汁の生ゝ仏の坐
先起ゝ丸ゝ釣丸蓋ゝきゝ何ゝ

立春の日の梅は新年の日の影
うしろ[illegible]まの枝や几帳越
[illegible]つも誰かもりいみ[illegible]
東宮亭府
[illegible]や梅の花
次峰[illegible]悼
[illegible]梅の[illegible]
仮初の交[illegible]の[illegible]

[illegible]や病から[illegible]
十二月[illegible]尾[illegible]刺[illegible]谷
[illegible]祝して
[illegible]梅の匂ひ
仙帷[illegible]妙方[illegible]
[illegible]に梅[illegible]
獨帳
[illegible]匂ひ[illegible]人[illegible]歎

夢の人の神なる詠

日遠きもたゝるやもある梅の花
里〳〵のうゑも咲うら海雲雲
雲の霞四方の梅もさきうらめ
糸遠引て人まつ能やゆゑの梅
蕚うめ花数日雲つゝ風うもり

日うゝうゝ

遠もゆゝ沙彌の木蔭やうめ花

宇遠咲やゆるたゝめ東風墨
梅さゆゑ人の面もや蕚のたゝふ
閑うゝ雲のうゝ埜うゝ東
きうゝて梅年をうゝや自漬敷化
是もきたゝ書て物うゝ月うゝめ
凡うゝ雲うゝ遠もゝゝたゝうゝ梅
紅梅や岩根たゝうゝ宮作り

根岩伊藤氏の庭化面うく

みちのくに雪見のこゝろ　梅和尚

様々の納屋に舟をつなぎて

出てゝ見ん興　柳あるじ　樹　枕

木母寺の常夜燈に資糧つ

きてうたんとつる沼の雪に門

まわりする勢渡しあるまくさんを

使しける友人のさゝ栖

古墳通り　柳年意仏ゝし　鳥

人やとゝまる　柳年なりたゝし

日のよさやあたゝかの水　光

参下りやたゝ乗り乃ゝあり馬

五形翁さけ歌ゝ人まわりの行し

寛さやし　日ゝのゝ行ゝ　柳

家つゝみハ夏をあるゝ　挿　玉

書　柳　蚕　鬼のうくあく月の歩み

意表負抵ゝいたきる籠ゝ

まもなく思ひあかしてまさらにおもひ入れ
ふ洞のさかりし坂も月照めてたちき
人の家ともなて帰さへ寄事き留るなり
あるとゆ子孫見し妻子の热残さる
やうおかひ曲り越て祖父翁の三日関は乃
こゝに系子ありて年句の一句

大津絵のかくれにみゆる椿の丸

蕉深の雲やしらき付て つまく棄る

新年つる鰈は旬や蕉つき

由誓子が句ニ対して

蚕の新乙女清き故の名は要もし

口捻く夫の勝は清し木川の花

松のはな那 鎖地れし多井筒かゞ

鶯やたゞ出て寺の初もまかし

池の句うち見れ清うの夏なたかゝ水

うくひす知なし及へ回す 硯箱

黄金千枝百年の根の雪
雪を花と見る春の曙
雪ちりて春の暮ぬる鶯の
黄鶯や二度寝ぬれば雨
雨さそふ春の野辺の芳野駒
懺法の過て日暮れば百ちり

地獄の苦をたへぬる秋の物
美しき物は何れ春ねこ
ゆふ日の里の桜は盛
ゆふ日の里の桜は盛
鶯の鳴かれぬ
不二の雪地かつをの海苔の味
蓴菜の月剃て後ぞ鶯

まう草やゝ圧つゝまれし紅砂糖
除つゝまれし雪ふるく膏つまる
京都會仁人いるゝやゝ
ゝ
豊年わらひ湯ゝ雪乃味
雪ゆく集ゝなり野ふゝ蓁
初茸のゝ嶮や藤のたゝ
ゝいゝ味ひ雪光ふ

ゝゝ草やゝ仁身深し
ゝ事ゝ土筆掘
猿ゝ土の篆柴やつゝし
蒲公英のゝ実ゝ
雪の白梅ゝ勢い山蓁ゝ

椿巣亭

庇丁ゝ袋のゝ水の芽時
いゝねゝ時

[illegible]の[illegible]書の[illegible]水のあふれ
朔[illegible]出て旅森乃[illegible]
古刷毛の[illegible]掃[illegible]餘[illegible]
[illegible]の家[illegible]あいきつ[illegible]家[illegible]森
[illegible]の[illegible]余[illegible]の山路の郷

閑居習何[illegible]別業[illegible]

泡[illegible]如[illegible]菓[illegible]杖[illegible]

貞徳抵若士茶毘の[illegible]

[illegible]の[illegible]河[illegible]雪[illegible]
[illegible]の[illegible]雪[illegible]
[illegible]年[illegible]矢[illegible]義[illegible]中
[illegible]人の義[illegible]買中雪[illegible]

中村宮

日の[illegible]
春の[illegible]
張[illegible]

はるの月うきしの家の塚のさうへの風
誰か来てもとはぬ秋の風味
却かうの月光り物なく人なの形
菫橘の名殘や野の鶯 丹
却て詠歌や先ゆく人を袖を捲
殘りきか跡くや陽を詠
歌へやうの五月雨ふるかきき
雲父への寝ぬ形の蘭の家

廿九日

四月のあきを殘彼岸ののその雅
海のきく人の月詠の名 春
正月の先をこまりて田植の郷
四月の八日聖の寒さの郷
なるかもしれなく梅の月の
新こら蕾の雪に殘りし春の
行燈月出の月の把斗 兼

出ることの出来ぬ里なれば里の雅
出代りやふるく嘆き多き職業
う出来たれく嶋の家数や五の原の
風の春の花菖蒲伊勢路　俳
鷹迄年みち寒ひしんぶ
五の五月乳ふさ雛なれば彼岸参
高鷹場のうぶやしんぶ
涅槃會や大きな山茶の香

新ちのきこまきへつかや涅槃像
ねんぶつ像珠数ゆさうて西行忌
河ふるさと雲先時よし西り忌

弘上村にて

のうさ十三式笠の人ゆ若鶴浦
主従のはなかみ行き果て

十五段

あこの年日暮しや蘭田返す

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一番[illegible]

涅[illegible]

陽炎の身[illegible]

洛外岡崎　お世継氏の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

陽炎や[illegible]

[illegible]

日蓮　暮浄光寺

人丸の[illegible]

[illegible]

巣こもりし　新そめの　まゆ
母屋造物若石崎
捨ふる　蝶よなくらん　我世の
城中寸土寸金
寸金の　庭とも　なる　蝶か　蝶
舞や　新　来の　往　来
蝶うつし　童　うつし　うつし
孤　蝶　人　く　嘆　哭

菜園や　露　ふ　蝶　ま　蝶
くくまて　蝶　ふ　ひく　死　ふ
似　象　と　見　ふ　蝶　の　春　眺
も　捨　し　菜　蝶　や　物　ふ
暁　象　の　ま　も　ち　初　蛙
あ　も　の　浮　雲　ふ　間　の　蛙　の　耶
お　ま　け　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　し　乃　ふ　鯨　や　ま　く　蛙

水はのまつわるかやの蛙なる
一夜うゝる宮の響清寒の聲
枕きゝ事
命もしらぬ事の命男に非
分なる清き松の四堺
新市のこゝ阿弥中やたゝ賣
西り村を忘れく鳴命
やる用めしに毎日きゝ新みしゝ

野馬元の赤鉤ちらへや帰雲雀
彼家ゝ牛ゝ野や蘇芳
明方の家根に寄雛の声
こゝゝぬ孫の性松やゝゝ孔
南氣月潮見や孫の聲
灰小屋ゝ山のちゝゝ孫の高
若過て再彼ゝゝ旅森寺ゝ孫思ひ生く

玄多[illegible]時々何ゝきゝ[illegible]ゝ
濡津ゝの舟橋の李数ゝ
土つけゝ[illegible]ゝ何ゝ
[illegible]ゝ酒ゝ[illegible]千度ゝ
業[illegible]ゝ[illegible]ゝ祝ゝ
来ゝ時ゝ[illegible]ゝ何千里
ゝ[illegible]ゝ妻ゝ
時つゝ[illegible]ゝ時ゝ 雁

[illegible]ゝ天津雁
いゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ
花ゝ[illegible]ゝ
[illegible]ゝ
徒[illegible]ゝ

羈中

烟りの出る里もあり筑波山

松が峰にて

鶯なくゆきの下の小つ川

春もいつ脊ばかり迄たゝ

なゝ[illegible]や敷もよもあらけなり

人もあて月よ拘れつゝ尾の鄙

さゝらえや庚汁の出るを小ゝ枕

見伸ゝ[illegible]あけぬ蕗汁

解文ゝ見て庚汁出すゝ角

和化たちの蕗ばかりきゝ赤

的家の橋ばよ猫洗の実生ゝ

菜ばゝ芋や[illegible]の高い門徒者

たゝのゝ[illegible]ゝ和巡ゝ

菜かゝや出材ゝ蕗の叔

ゝばゝ花ゆゝのゝみよいへ二軒

ゝ[illegible]の山

市ゝ[illegible]花ゝ[illegible]
[illegible]人和[illegible]
[illegible]
梨[illegible]の志[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

武士や雛笹さゝげて人の中
[illegible]
[illegible]

十粉屋にて

ひゝ[illegible]の翠[illegible]富士
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

寒気のうすらや江乃嶋の坊さまの
清新俳句二ちらけし変のいろ
おつきさま百年久しかるべ
雪中あるさらるる面つら強くも
寒さうに八牛まもまけし濃の面
さらさらもやもやと柳うつまて清水まま傳
機おろす幸かつくや寒行面
付るの業社さる烟や寒行面

さらさらの却さらや寒さも枝さも
春さらも牡丹中きの廣さとの鶯
さらいつ屋の却さらの冬の
信乗さら第山さらうし寒のさら
年暮さる市馬のあるさるるく
さらさいるるいるうれまきの却さる
深淵一南さる壮さの却さる東新
さるうて力主の業る精神さらし

今ハ海分箱館の港にまてとの名
の芳りしきも胡沙うく赤紙ちらす
うたのきこへはくもはうとまて
面をあつたし況ハ十八年の星霜を
をくりかき新鮮たるひよりてつくしこと
まかりうとの新くうの奥こあるねと参り
ぬきまふいうとたしくしこをきく
七竜丹の梅ハ決をうねる墨田川の梅ハ

筆をもつてあるも煙ハ緑ハうるけ
遠句ハくこの故叩くるきこもうこ三
十日餞のちう兎ハ馬のきたれ
けきんとおるうの期のこの鶯きを
ハ魂をうるの動ハていつくハ伝ハ
きうんとを

花過ぎて何ハあるうん日の永ハ
永きうや鳴門を越し鯛の味

あのおもや温泉よりの絶て滝まつり
何をして人〻雲をつかんとする日はあるか
立やすきこと日ばさへ〻〻思ふ
初人の餅　春はあれども永し

平井松窟堂

宿をする　春と浪物ゆくの永き柳
涅槃会　春して来る　花の角
あ〻　ふれば紙ゆる角の蔵〻あり

何の芽をもつふ　花の松〻　角
巫山の夢　諸越人の夢は
さ雪　ふ　ふ　ゆ　角　な　ふ　ふ
の　ふ　つ　ち　の　神　は　あ　ま　ま
碧梧　梅　閨　一　叶　は　原　燈　ふ　ま　ま　は
ま　や　は　ふ　逆　ゆ　ふ　は　つ　ま　雲　ふ
め　ま　ま　る　比　ち　う　花　川　ど　ま　土　橋　の　ま
た　ま　ふ　ま　の　橋　ま　う　伊　藤　公　廣　ま

波しぶき数千丈の滝の音なるなきを聞くまに

この夕ぐれにまでぬ

葉人のまゐりもてあそぶ乳山

あを竹をうゑ水をいたゞきたり

下郡の敷きく芝は世祝の

日ぐしにふる人の数ましし

道灌山のうきゐあるきを

見つゝ行く浅草つゝ

春の野を峰を数ふる芝の

金砂山

夜をあかすけのみねや雲の梯

元名山

人くを花のうつるを見つゝ

木のもとおさ分の霞の月の食

たゞすこゝ九つ高台を見出

雲を養ふ[illegible]花は雨
翌朝[illegible]数花を[illegible]
[illegible]
花乃白[illegible]
墜[illegible]の目[illegible]
[illegible]
[illegible]
花と[illegible]

草卧[illegible]
白[illegible]
[illegible]
花[illegible]

山王山

一[illegible]上野[illegible]
對塔老人の一周[illegible]
俄[illegible]

死ぬるまでの詩一篇を残すべし

袋田村流三重塔

志はるばるとまねばかりすれ　滝の雪

萬事事分既定

花鳥も何とて人にいとはしし

藏經轉讀の堂野に立て有者

淺草ちかきの花ゆえ隅田川嘯月

ちるうちの花見うえ羅漢寺

上野

はるばるは社寺掾をとる花長者

京はは友人を尋ふ

花年詩のあけ不の色ゆえ家

送別

旅窟さるうちのく点花日和

飛多山

[illegible]

乳浦慶頃の[illegible]

[illegible]

[illegible]山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三月御停止

所木戸[illegible]

[illegible]老人の一[illegible]

[illegible]

[illegible]山

[illegible]美栗川[illegible]

[illegible]人の出[illegible]

渉る境界を覗き侍りし時

花ちるや壬生の桶取見てまつの
孫かくやしらずへし黄金仏
すゝめの捉あれ云深く深き芳何房
に営る銭耗してやさちの國へ下り
けるとそ

子何ゑへて上京せ芭乎旅宿ゑ
正像末和讃をいとふ高く読む銭

朱法聖人まさ花ゝ何ぞ花ちるらむ

何某居別業

花まちに譲代なるへし下屋敷

此頃野竹林院に何かし坊柿木坊
得て蕉翁の肖像を彫刻せんとるを
ものうち桜木を出山蔵王の神木
して芳野三の翁人の手をかりる
下しむあるとかたれは嘗し

さくらこう鬱蒼たる谷に神うら

墨田川

櫓うつ。乱れさくらに物うさ

塀もきてくされる内奥や尾花う

人の出る上野桜ゑの

遥市ゑひちやる波の音

矢背大屋敷内

門院のちらつ白つき遥斜うら

世ちの家波をんうら水

母ちゑ遥人遥ゑ一瞬息のゑ

一ゑ過てきのふもまた藤棚田

南の花ゑまう

ちり残り桜年遥ゑ過ゑ

紙鳶の凧

後やうま似一白桃のつかうゑ

紅ぬくし桃ちゑ下内麦の丈

詠ける梅子人まし かゝの花
連翹や篇にあらす 継ぐへき
きん翹やゆかしき蝶の夢にも絡
海棠は南北なつみし 本寄
たとへ見まくいはふ気色なる
海光ありて李ある夕日なる
山里の日影高くして辛夷哉
ちるしもの辛夷子山の日足淡し

見ぬしらき花に見えけり　松樹
人は文字をたまはく
字を書かくにも我の花つゝしむ
雪砂山のとゝ佐々木氏の鏡台
執筆門文て楷にめかし安寄くる
五崖断巌をまちのかたより五十町
修行をくおくる座く窟なる
愛宕山の坊あり椴の大樹立く

[illegible]

雲路のあり

紫桐さつし　紫雲をやうかし

山吹のうち　[illegible]　いまかうな

やまうの[illegible]　やうつるし　安きし　塚の桜

那須野

牛飼　[illegible]　[illegible]

神[illegible]　[illegible]

[illegible]

汐風　[illegible]　[illegible]

狼の[illegible]　春　[illegible]

[illegible]

鶯　[illegible]

白　[illegible]　藤の[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

物こゝの形須待や梨の花

湖水をかすめてふかき春雨

月の光らゝたる西の方枝

さゝ東坡居士の句よもぎ原

瀬田の夏　洋　あつたらたゝる

花の盛りこゝ仙臺粥の岐

田植ゑ終る永野松茸儘す

待ち寄るまちかつてもこゝの

姑よつゝいとたゝる菓　橋の邨

拘杞菓つも青や高粟の細ち毛

瀧壺よ俳諧試み菓磨ち

おろ〳〵きゝ日数筆原菓舊の

多の菓に風ゝ門杜校の

日乃ゝや古菓よゝる老ち面

ふゝゝねゝ増る鴻待や ゝ九菓

月居嶽　矢内玄孫城跡月居ゝ

[illegible]

笠取の野辺の雪の夜ちかく
いとせんの風のさそふ物
寒さかな夢うつつの名残哉

[illegible]尼追悼

うねの雪さそふ春の夢
何ゆ此墓ゆく烏城哉

[illegible]

[illegible]

[illegible]人ふいまを[illegible]文衣
[illegible]の歩うゝ[illegible]更衣
寒生木の[illegible]何やらうるこの人

[illegible]尼初七日にまねかれて

松[illegible]弟[illegible]仏[illegible]文衣
拾[illegible]人[illegible]物[illegible]

[illegible]きて[illegible]ゑ[illegible]縫あけおろす袷を
[illegible]公[illegible]姉[illegible]もりて書きそ[illegible]

上野山

[illegible]仏の[illegible]

浅草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]長男も[illegible]義[illegible]

買[illegible]月十首

[illegible]て二日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]川[illegible]堂[illegible]

[illegible]地名[illegible]

[illegible]藏[illegible]

杜宇

[illegible]の[illegible]義[illegible]

四月十七日
安國殿報禮
郭公なくや清絵の獻雛稼土
氏家守りとまめて
郭公啼やきこえし葯葱汁
車井をのぼりたんよりこゑ
とゞめて
こゝろふて行はまたきの寛をとゞめ寸

郭公人のまねするぞかなし
こゝろ毎に実珠や咲ん清香れ
蜀魂山のふかきにたのまれ寸
枕きゝし残よとて
おもふよるの杖鳴くこそ越月とのま
故郷祠てまつ藤はやはり時鳥
啼きそれ杜鵑
我ぞ鳴誰の井より清ら藍ら

[illegible]

[illegible]

坂本山王祭禮

濱[illegible]の神輿出でゝる況

上加茂のゝへるさ

係[illegible]でゝ祭り是[illegible]

さ[illegible]

掛[illegible]つ葵[illegible]

杜宇鳴きて[illegible]

[illegible]

世[illegible]中へ宵中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の川

葵[illegible]目の[illegible]

葉[illegible]

上野

咲も拾ひ捨ひ焼ぬ櫻の実
山桜の落しておくまの繁り孔
木譲り拾ひ出てあり若葉時
麦華よ志ものもの矢弱の郎
舟倉に人の出這の義の一の素
甘酒よりまきあるや木下蔭
常磐木のちる中よ芽ぶきのうち

うつ楓紅葉ぶり抜て初もうち
立ぬやる被のうちや美枕

病後

牡丹花よ出ぬ老の杖たのし
うぐいすのなきて帰りし牡丹哉
繁よもぬ花ぬ花ぬ牡丹哉
口をしう菊のうのうちんの郎
郎のうき料理ぬきほたんとち

苟菜や　初合の子に　吟ず　先
苟菜に　ちらるる　菜の　紅
もり立し　精進ものや　ふつきく
菜莖に　屋ふる　杜　ふ
うゝき中に　郭あり　蓮に　花
川ゆに　ふ　試出す　毋の子供ふ
川骨や　盥を　丹に　象　四
川ゆに　ふ　生漬に　きしに　ふ

日吉貞之丞鉢木

卯の花乃　雪や　さるゝ　謡　物
卯月に　ち　杉に　ふる　岩井ふ
ふの　ふ　やうあ　屋出す　雜魚船
うち乃　花や　ものゆ　けふ　蟾の　ふ
うゝ　初の　ふに　花塚に　新世ゝ　耶
初の　ふに　墻や　まし　生の　角
見ゝ　す　橋の　ふく　行　ふに　張

たちまちの昔もやうやう兄の袖
橘のまさ野にうまれ　仮住
立花まちまちにやうやう烏帽子
川茨ばらのもとにしの茨の花
香年ふる人やあのまちまちつゆ
須磨
ふるし世ばしまちまちやまちしのまち
うつ森にて散しまちまち茨ばらまち

もの事はたたへまちやうやうの花
ふるしやはか人所の春まちまち
摂津國江口まちまち
人まちまちはさへ人えまち茨まちの花
香沈歩逐鈴光元青血化
為原上草
於のまちまち野ばらさまし美人まち
ちまちまち人まち家ふる　洞元まち人所

起くしやぼたんや萱草茄子のたな
外のうれすすきや菜山ふかきうつ
竹垣ゑやせ日の雪中二三寸

大雪つゞきうもれし比

大雪のうへやゆきをおしてゆく祖の庵

四月十四日二句

雪も光るとなりし春霞
蒙のまなゆきをしてゆく

蕨をゆでゝ黄色に光るうり
樗ゝ実中ゝ花なし初松魚
ものめずらしく新のつゆや雪ゆえ

堀内途中

道くしや賽乃麦うゝ
わきゝ過ぎ人咳へ京新茶を
堂ちの國たゝきちん葉ゆ

五雨亭ゑまねきて

[illegible]
雨もよし
盃をかへすく出す
きつ帰きれぬ村の賀茂の郷
[illegible]行家をしの行
あたに来る先まつ辻の花
似るを聞いるの行く家の
神風のたるへるの 競馬

[illegible]
麦苅や 宿の遊女ひとり唄

貞享廿三年の秋百年一夢

堀つゝましうる夢を夢ゝ
思ふ人おもをつ水鶏
菓ねる[illegible]や鳴
蛍四ある元禄町や 鳴くなる
四貝ふたゝ人を鳴ゝ鶴の鶴

餅搗つゝ

餅搗をきめてきけゝ鶏の聲

盤嚢の法たるや網干場

うきたる市餅をきき探るうち

籠出きて調つゝ詠ひすゝむる鶏

鶏人は小樽を背てかゝうの形

吟りきて強いたる鶏匠兼

気いくゝ籠荷ひ形歩の鶏

鶏つゝや衣をあきゝ縄掛

形の吟くゝ新をゝ祝ゝうゝ舟

葱をゝ花を見きる蛍の形

川筋のゝ所ゝ蛍丹ゝ

小糸乃所ゝまゝうゝ蛍この糸

鶏ゝきゝ養まつ咒や所ゝ籠

ゝけ竿の網干ゝ行蛍ゝ

月かきし蛍の形浮や牧ゝ

霊巴橋

月まちて金澤の妓よきまし

子見墓未

ちる桜ふる樹ふる巖妓の

面影むすぶねくしや墨ぞこ

歌へ死さきへまつる蓮の墨

病床

煩へる槐ふる妓をつまらる

岩城小名濱

笑ふまま松魚や堀のむまま丹

吹うきて水も赤く死場ふる

馬の尾ぶ蚊ふ際ふ笠谷越

柳ふる荷鞍へまや枝ふつ

数かまつ鳴や物ふためふ法

尾

夢ふまま芽乃蔵りや枝蛙

楽市のあと柳生や牧堆
蘭を生ずる阿弥の際きふ橋ふ
徳蔵寺由阿弥の制ふ伝ふ
のもとうてたふ伝ふ開きて
詩詩ふ歩ふ廊やロ枝屋
もの也つきぬ津ふ捲ふ廊ふる
山寺貴ふ廊ふ清ふ井出の水
松蔵寺ふふふふの歩森ふ

丙午 火災のち建もつる故富住ふ
のさふる
いふふふ蚊年四八出寸睦月ふ京
世はふ伝ふ尾ふ立原牧やふ
一石橋を由ふふふふ宗の
うふふふふたふ伝ふ
百年まへ懸つふを橋ふふ
晏起

[illegible]日の[illegible]は[illegible]夢[illegible]
ねつ起[illegible]八[illegible]破[illegible]
神[illegible]に初[illegible]
[illegible]
蚊屋潜る[illegible]人[illegible]焼[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]市御[illegible]
[illegible]小盗人
[illegible]
短夜や[illegible]鼾[illegible]耳に入
[illegible]
[illegible]垣一重
[illegible]花[illegible]
見[illegible]に[illegible]
行燈[illegible]

旅愁の何うらゝ又と度の月
絶たの雲淋しき夜の月
浦の月夏無おもく多し何樂
なつの月ハかゝるを望ひ
嶺乃つゝひ迄う　蛇愛多
波ちねゝ　板坂　つゝいちこ
木愛多る　山伏ちち出る
めゝ馬つゝいと探す丹出兵う

古畑や　柳ゝのゝく　花迄ゝ

大森村

青梅や　変ゝ海ゝ　野の春
あゝゝ　兎や　様ゝ　宮ゝ　兎ひ夢

在原爾亭

紫陽花　月　夢ゝ　蕭　葉ひ
ひちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　影の小　宮ち
撫ゝ　ひたゝ　ゝ　ゝ　塚

瞿麦のもとゝ露ふかくたまりぬ

日中の炎熱をしのぐ

ゆふ立うへをゝ遠近に鳴く那須野哉

山吉の杉あり百合も墻のもと

立鉾宮

萱草の花ゆふ立ちぬ神の前

萱草や京ちかきのゝ生ぬ

可使食肉不可食菜

ゆふ立やさゝふ竹ぬゝ水うゝ世

竹植て幾年経ぬ高さ人あ潔

たゞ雨の雲ゝ門のゝ行 嗣日家

二年の夏の涼きゝ河ゝ宿

幾年ぬ鳴蝉ゝ

人送ゝ

山梔子の庵ゝ蓮の小盃

鐘を撞る

時ならぬあふちの花や色こゝろ
引しふやゝ薫りまさいつらま傳
う者くさふ三井寺の暮こゝろ
うれめて雲ふきぬや早苗時
休路して立なへそこゝろん

倣祖翁口吻

苟も蛙くり田う虫盗慕ふ

くたうけのゆききる起て田う虫ふ
るゝ門ゑ待ふ乙女のこゝろ
早乙めのこゝろ雲や夏乙

最上ふう

二寓ゑ出ふて湯殿まゐり兼

十七日麻布雑色を通りこゝ

木さうけ花や五月の時鳥
きふ蓑ぬ登きく何ぞ五月やと

清滝や波に散り込む青嵐

五月雨や油うつまる川気

須加川市原氏

きみまつ焙焙にうける桶の臭

深草阿弥陀峰

夕覚ハ人に及まぬうき巣かな

長岡芭山きの人の蕉翁を

きゝ奉りて

おもひ出や蝉のなく

我ら夢や軍鶏か目覚す樹の光

山行

青葉後ろもたゝ淋しや塚の高

山王社

神無ヒ旅の宿もせぬの夢

咏ぬ歌の花に秋を思ひ

明やきき初ひ〳〵きて照射

名越一流の貫主仏化たまひ物
常ときめきて所めぐまるる一さ
方々の高徳の尊宗さへ
法華きらは氷室のすゆも法の袖
法華のちかのをまるやう舞
市中の蘭奥や氷うり
六月十六日一日掛を書
からくの琴琵きく雲の暑の形

恵照律院 堅道和上阿毘達磨
大毘婆娑論写授

云々ときこへる法の河つきの形
いさきへ暑き河原や流波
夜のあけて涼しきうむ暑の原
次第乃乃時計ときつ暑の去
帆月風のきとの暑や白濱前

吾妻森

鈴の音をるとちふきく夕すゝ美

經石を洗ふ大川を涼して角力の七夕まつり祇園石をまつる　宗吉

うつくしき涼しさ哉　徳元

青風や亡魂なぐる船の中

甲斐のくにまつり

思遊亭吾無

月すゝしく袋中の餞る本堂

川床や柳中うけて月涼し

赤ゝと汗とまりし七月の門廷

月橋をいさるる

暮ゝ涼し祇園の婦切

人うつる河原をみる

すゝ風やねぶるの種ゝ吹きつし

藏ゝはゝしも吹て夕納涼

鶴の夢ゝ稿のまゝ独先きし

涼ゝ乞や柳ゝ此壁ゝ也

妙厚信女のために浄土三部経一部
一巻ずつ写し奉り佃島の沖より
奏こと合掌をけちえんしたる
風うきぶかく浄土も何ぞ経をうし
干さぬ先に奉る詠るも風薫る
警かるの業をふるひ書 嵩
ゆゑなやもし自然林叢のうたゆひま
自由やめ[illegible]敷[illegible]しも迫奉

雲の海波おだやかに歩行うし
久もたれうわ来たるうしし歩
山王神の
御小屋の桟敷まわく祭の形
文雅の光ひにきく穂ゝこの世は
宗工たるうし大梅先人の悼
何事も中きこと汗をあるうしに梨
祇治うち計汲きるやおうし太

何かうれしきもの　心ち

日吉氏月次

葛水のうはの浮ぬや　禅能

慶祝　僧祇律講讃

好こうの誠も何の竹婦人

岩のねのひきくは清き

重ねて誠こう

回向こうの欲しうのきき清水かう

[illegible]

かいきの葉をいきしこ岡

地蔵菩薩の清水この本

山志義岡新地蔵菩薩の本

百年過ぎ迄こうの広の色

ろ社の戸ろえてきの　冷こう広

碁盤置きの　のふきて　平広

多佛ふて雨ろうこ蓮花ふ

見る人はまくらに蓮の匂ひかな
目の前に見るものは山の
寺の本堂や深千軒の墓　変
旋毛ゐる砂山異しこの海
彫刻たるむ木蔭ある野に
ひるがほや家のまはりを飼ん
夕顔やうつくしの花ゆつれ
ゆふゆふやすらひの人の方向

夕彩や蔦ふる大仏前強もの
小坐敷に年暮れの夢やかん虫
麻苅るなくる蕎麦畑松に
秋ちかく柳のいろや施餓鬼舟
秋を待蕣賣の荷うらへ
河内の稲ゆるまるあれば交神楽
形代や蓮岡ふるえん塔ぬ

莫泉庫

安政三年稿

初編

一具歩致句集

社盟

香夷則

太玩